

「青森県住まい・住環境学習指針」シンポジウム  
～生きる力を学びリビングリテラシーを身につけるには～  
開催概要

---

- 日時 平成31年2月14日（木）14時から16時30分まで
- 場所 ねぶたの家ワ・ラッセ 2階イベントホール
- 参加者 教育委員会、中学校・高校教員、大学、コンサルタント、不動産、設計建設、銀行、電力、  
県・市町村職員 計81名
- 次第
- 1 開会
  - 2 あいさつ
  - 3 事業概要説明
  - 4 基調講演  
「住まいと環境の“学び”について」  
弘前大学大学院 地域社会研究科長 北原 啓司 氏
  - 5 パネルディスカッション  
「生きる力を伸ばすための学習・取組みを考える」  
コーディネーター 弘前大学大学院 地域社会研究科長 北原 啓司 氏  
パネラー 北海道立総合研究機構建築研究本部 部長 松村 博文 氏  
青森県立青森西高等学校 教諭 木村 紀子 氏
  - 6 質疑応答
  - 7 閉会
- 

■議事録

1 開会

◇司会

これより「青森県住まい・住環境学習指針」シンポジウム～生きる力を学びリビングリテラシーを身につける～を開催致します。主催者を代表して青森県県土整備部理事新井田よりご挨拶申し上げます。

2 あいさつ

◇理事

皆さんこんにちは。青森県県土整備部理事の新井田でございます。主催者を代表しましてひとことご挨拶を申し上げます。

本日はお忙しいところ、「青森県住まい・住環境学習指針」シンポジウムにご来場いただきまして、誠にありがとうございます。また、弘前大学教授の北原様、北方建築総合研究所部長の松村様、そして青森西校等学校教員の木村様におかれましては、ご多忙のなかシンポジウムの講師をお引き受けいただき、厚く御礼申し上げます。

さて、県の住生活を取り巻く環境は、低い耐震化率や空き家の増加など厳しい状況にあり、これらを少しでも改善していくことが課題となっていますが、一方で県民の皆様に、よりよい住生活をしていただくためには、青森県の気候や風土を踏まえた住まい方を身につけていただくことも大変重要だと考えております。これらの課題に対応するため、県ではその指針となる青森県住生活基本計画を策定

し、様々な施策を展開しておりますけれども、平成 28 年度の基本計画策定に当たりまして本日の講師でございます北原先生のご提言を踏まえ、住まいや住まい方に関する基礎的な知識や判断力、リビングリテラシーの醸成を目標の一つに掲げ、新たな取り組みを始めたところでございます。本日のシンポジウムでは、県の取組をご紹介しますとともに、北原先生によります「住まいと住環境の“学び”について」の基調講演、また 3 人の講師の先生方による「生きる力を伸ばすための学習・取組を考える」と題したパネルディスカッションを予定しております。

最後になりますけれども、このシンポジウムが皆様にとって有意義なものとなることを期待申し上げ、開催のあいさついたします。本日はどうぞよろしく願いいたします。

### **3 事業概要説明**

#### ◇担当

皆さまこんにちは。青森県庁建築住宅課の佐藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

住教育の課題として、衣食住について学校の家庭科で学習することになってはいますが、衣食に比べますと住に関する学習時間が少ない、青森県の住生活・環境について十分に反映させた教材がないという状況があります。また、一般生活での課題としては、耐震化の敬遠や自治会活動への無関心あるいは新築・持ち家志向が強いこと、空き家の問題が大きくなってきています。

これらの課題に対して個別の施策も進めてきていますが、私達県民一人ひとりに住まいに関する基礎知識や判断能力が備わっていれば、課題の解消に手助けとなるであろうということで、平成 29 年 3 月策定の青森県住生活基本計画に、「ライフスタイルに応じた住生活を実現するリビングリテラシーの醸成」を目標に掲げたところです。その計画を踏まえ、平成 29 年度から今年度にかけて県の重点事業ということで進めてきています。この事業は大きく分けて三つの取組で構成しています。

一つ目は樹幹形成ということで、いろんな取組をしっかりと樹の幹のようなイメージで、リビングリテラシーを向上させるための体制を整備するものです。平成 29 年度に検討委員会を立ち上げ、座長として八戸工業大学の橋本副学長、弘前大学北原教授をはじめ、北方建築総合研究所・建築設計事務所、そして教育関係の方々にお集まりいただき、今後の住教育をどのように進めていくかということ議論・検討いただきました。その結果平成 30 年 3 月に策定したものが本日のシンポジウムのテーマとなっている「青森県住まい・住環境学習指針」です。

二つ目は、巣立ちプログラムということで学校向けの取組です。住教育副読本を作成しています。29 年度から 2 年かけて、県内の小中学校と高等学校の先生方、そして教育委員会の方々にも内容を検討していただくとともに、検討委員会にも意見を聞きながら作成しました。「青森県住まい・住まい方読本」というタイトルとし、大きな特徴としては、小中高の内容を一冊の本にまとめたということです。目次のとおり、赤の部分は小学校、黄色は中学校、水色は高等学校となっており、キャラクターもアオイさんとモリトくんということで小学生から高校生までだんだん成長していくという設定にしています。

ではなぜこのような形にしたかと言いますと、例えば、この読本を手にとり初めて家庭科を学習するという小学生が、この本で住宅って面白いなあということを感じ取ったとすると、中学校や高校ではどういう学習をするんだろうと自ら学習できる。また、住宅や住まい方というのはいろんな分野に関わるものですので、子どもたちの好奇心をいろんな分野に向けさせるというねらいもあります。また、青森県の住環境を反映させるということで、例えば結露がどうしてできるのか、結露はどういう場所でできるのかといったところを学習し、結露を防ぐためにはどうすればいいのかということを考えられるような内容としています。

次に、住生活出前授業の試行ということで、こちらも住教育検討ワーキンググループで内容を検討

いただきました。小学校向けに「掃除の仕方を考えよう」、中学校向けに「家庭内の空気汚染を減らそう」というプログラムを東洋建物管理さんにご協力いただき授業をしました。また、高等学校向けに、「自分に合った住まいの選び方」、県内の高校生は卒業すると1人暮らしをするケースが多いため、アパート選びの基礎知識を身につけてもらう内容となっています。こちらは県宅地建物取引業協会さんにご協力いただきました。また、「ライフステージに応じた住まい」ということで、そもそも住宅とは何のためにあるのか、自分が大人になった時にどういう住宅に住めばより豊かな住生活を送っていけるかといった内容の授業を蟻塚建築設計事務所さんにご協力いただきました。

また、学校だけでは冒頭に申し上げた課題に対応するのは難しく時間がかかるため、大人向けの取組も進めています。青森県の住生活に必要な基礎知識についてのリーフレット作成を進めています。また、来年度になります、大人も学習する機会「親子で学ぶ住まいの教室」を予定しています。

これまでの取組を活かして、さらなる住教育の充実、体制づくり、県全体への波及を図るため、来年度以降「リビングリテラシー波及促進事業」でさらに進めていきたいと考えています。

関係団体におかれましては、出前授業プログラムのご提案やご協力をお願いしたいと考えています。先程ご紹介した4つのプログラムの他に居住環境や省エネ・防災・健康あるいは住宅ローンといったテーマで出前授業ができるのではないかと考えていますので、是非ご提案をいただければと思います。また、県内各学校・先生方におかれましては、「青森県住まい・住まい方読本」を授業で活用していただきたいということと、総合学習等でもご検討いただければと思います。また、それ以外の皆さまにも来年度の住生活イベントの参加について前向きにご検討いただきたいということ。また、県民1人ひとりが今よりも豊かな住生活を送れるように皆さまもリビングリテラシーの向上に意識を向けていただきたいと思います。最後になりますが、ご提案やご意見などにつきましては、いつでも私どもに教えていただければありがたいです。ご清聴ありがとうございました。

#### **4 基調講演**

◇北原教授

ご紹介していただきました北原です。

リビングリテラシーという言葉が出てきて分かりにくい部分もあるんですけど、この指針は、県民一人ひとりが将来にわたりより良い住まいと住環境で暮らすことができるよう、学校における住教育や県民に対する住生活関連情報の提供等を充実し、県民の住まいや住まい方に関する基礎的な知識や判断力を向上させることにより、県民の住生活に対する意識を高め、生活創造社会につながる豊かな住生活の実現を図ることを目的するというのが一昨年委員会をしている時に作られた案でした。

委員会でリビングリテラシーにきなさいといったわけでもありません。県庁の方がどうでしょうと、住まい方に関する基礎的な知識や判断力だと。私達委員会がすごくいいと思ったのはこの判断力というところ。住宅のことを知ってもらおうと思ったらどこから教えればいいのか。断熱のことを教えたらいいのだろうか。安い作り方を教えたらいいのだろうか。どうやって建て替えたらいいのだろうか。そういった知識や情報を入れていくだけではなくて、とても大事であり、今の日本の教育で欠けているものが何かと言ったらこの判断力だと思ったからです。この判断力を私たちが住まいに関して何の判断をするのか。一般的に考えて住宅に関して決断しなきゃいけないって時は、どう買うか、どうこの家を建て直そうかという話のときがありますけど、判断力ってあと何があるのでしょうか。すごく大事なものが私たちには欠けているような気がするわけです。

リビングリテラシーについては、県の書類にこんなことが書いてありました。リビングは子供やお年寄りに親しみやすく住まいや住生活をイメージさせる言葉、リテラシーはみんなが身につけるべき

基礎的な能力を示す言葉。二つを組み合わせるとリビングリテラシーだと。それが将来的にいうと、子どもたちの生きる力を育むという今日のタイトルになるわけです。「生きる力」というのは、2000年ぐらいに文科省が出した言葉です。総合的学習によって生きる力を育もうといういろんな教科の中で生きる力に最も近い教科はなんだろうと、家庭科がそうなのではないだろうかというお話しがありました。その家庭科の延長に住まいというのがありました。その中でリビングリテラシーというものをどんな風に私たちは意識して、判断力を付けるために、いわゆる建築や設計の専門家の方々、そして先生方がこのリビングリテラシーというものをどういう風に子ども達に持ってもらおうのか、どこでどういうふうなお手伝いが出来るのかが大事になってくるわけです。

何年前かに学校で住教育とって最初に出て来たのは防災でした。防災とかバリアフリーの話です。特に東日本大震災がありましたので、防災関連が凄く話題になりました。しかし、防災的な話にいかずとも、親元から独立したばかりの子ども達にとってどうやって家を選び、どうやって広い家に住むか、あるいは賃貸に住み、いくらくらいでやっていくのかをイメージする、そういった学問が全く学校教育の中ではなかったわけです。そういうことを知らないと生きていけないのではないかとこのリビングリテラシーの中身になるわけです。とても大事なこと、勘違いしてはいけないことは家の作り方ではない、住まい方ということです。家の作り方であれば工学部や工業高校に入ったりして学べますが、家の住まい方というのはどこで教えてくれるのでしょうか。ライフスタイルの教育です。生活のための知恵や工夫を自ら学ぶことです。作る能力ではなく住みこなす能力を教えたいわけです。せっかく良い住宅がありながら上手に住みこなしてないというのは避けたいわけです。寒い寒い青森の場合に、どうやって上手に住みこなし青森の良さを感じながら、寒くないあずましい生活ができるかということを考えていかなきゃいけない。まさに住まい方です。

これを家庭科の先生方も勘違いするわけです。アンケートしたら「私たち小中学校の家庭科で住宅の話を知ったことなんてないです」、「中学校の技術家庭科の授業で家なんて書いたこともない」、「何を教えたらいいのでしょうか」と言われて困ってしまうわけです。青森の家庭科の先生にアンケートで聞きました。1年間のうちにどういう授業していますかと。家庭科で衣食住という3分野教える時に小中学校では文化祭や参観日等いっぱい行事があります。あるいは運動会の練習が入ります。そう時に最初に中止にする授業は何かと言ったら家庭科だと。しかも住居だと。マラソンの練習した方がいいという話でつまり住居は最初に抜かされると言っていました。だってそっちは得意じゃないから仕方ないのですよと言われました。しかしそれは大きな勘違いであろうと思うわけです。

建築のことを知らないから教えられないじゃなくて、何を教えていいかが分からないだけの話なのです。先生方に言いました。あなた達は50年近く生きてきて、住んできていますよね。それでなぜ子ども達に教えられないのですかと。子どもたちが知りたいのは、建築学科で教えるような話でなくて、どうやって住んでいくかという話。あなたたちこそ教えられないといけないのではないかと。それこそリビングリテラシーです。僕は建築学科で学びましたが、リビングリテラシーを学んだ記憶はありません。建築基準法とか構造や法律は覚えましたけど、リテラシーは学んでないです。じゃあ何なのかってことをもっとわかりやすく青森で発信していかないといけないと思うわけです。

一方で、この時代ですからエコに関することも重要になってきます。環境というのは受け入れるものではなくて関わっていくものです。環境と共生するライフスタイルです。共生という言葉も人によってはかなり厳しいことを言います。黒川紀章という建築家が「共生（ともいき）の思想」という本を書きました。なんか良さそうな、優しそうなお言葉と思って調べたら怖い言葉でした。共生というのは相手が死なない程度に相手を傷つけていることを知っていながらやっていくものであると。環境と

はそういうものであると。黒川さんにしてはいいこと言うなと思ったのですが（笑）、環境と共生するって言い方を私たちは考えないといけません。何をやったって環境に負荷を与えてしまうわけです。

小学校から学ぶことがいっぱいあります。環境を守る、つくる、育てる、この言葉はよく使われます。景観もまちもそうでした。守る、つくる、育てると。そういったことを授業していくこと自体がまさに青森県がこれから育てようとしているリビングリテラシーの内容だと思うのです。

例として、私が弘前大学の附属小学校 6 年生にやった授業のことをお話します。快適な生活の工夫、北国の冬の住まいで暖かくしかも節約して暮らす工夫を考えようと、いかにも家庭科らしくていいと思います。北国の冬の住まいを暖かくしたいのだったらりっぱな暖房器具を入れればいいのですが節約して暮らす工夫を考えようと。この授業をする前、生徒達に質問したいことを書きなさいと言ってレポートを書かせたそうです。たくさんレポートが来てとても教えられないので手伝ってくれと言われて、私が質問に答えるおじさんとして行ったわけです。しかし内容は子どもだからではなく環境の本質的なことになるわけです。

例えば、どうしたら部屋全体を暖かくできるのだろうか、局所暖房と全館暖房の違い、あるいは暖めた空気を外に逃げないようにするには、このようなことを習っていなかったとしても、子どもたちにとってみれば、暖かくしても逃げてしまうみたいなことは分かっています。あるいは家族のことも考えます。電気と灯油どっちが安いのですかと聞かれました。オール電化はほんとに良いのですかとも。

子ども達にこういうことを聞かれていく授業です。教科書などはありません。じゃあなんでオール電化が使われるのかというと、ガスの危ないところ、大震災の時にオール電化住宅が困ってしまったこと、いろんなことを知ってもらいながら、オール電化の良さとも危うさも含めて授業していくのがリテラシーの授業です。学校の教科書だとここで教えるべきことは決まっていますが、オール電化住宅の何がいいのかってことと何が怖いのかという話を教えなきゃいけない。

ソーラーハウスもありました。いくら子供だってソーラーハウスで太陽光・太陽熱を暖房に使っているってことはわかります。しかし、先生、ソーラーハウスでなぜ冷房できるのかよく分からないと言われるわけです。そういうことを小学校の先生がそれは習わなくて良いて言うのがダメなわけです。それをやってしまったのは僕等の先生たちでした。覚える必要はないからと言われてました。冬の昼、太陽の光を受けてそれを屋根裏で貯め、太陽熱があれば暖房器具がなくてもあったかいかもしれないねってことが分かるわけです。夜は太陽なくなっちゃうよ、でもそういう時はためておいたところから輻射熱を使うと、ここまでは子ども達もまだ理解できます。そうか、冬はためておいた熱を使うのだね、じゃ暑い夏はソーラーハウスって意味ないんじゃないのって言われました。大人だって、夏にソーラーハウスで何が起きているかちょっとよくわからないままに家に入れているわけです。こういうのは、小学校で習わないからって言う話だけでなく、実際に空気をうまく移動させて徐々に人間が工夫や知恵を使いながら熱を使うことで涼しくしているわけです。このようなことを教えたいと思わなきゃいけないわけで、わかりませんと言った子ども達に大学の人間として、ソーラーハウスって冬だけじゃなくて夏だって意味があるよって言う話をしました。

壁の話も聞かれました。外張り断熱って？木造と鉄筋コンクリート、どっちが暖かいのですか？風除室って本当に必要なのですか？風除室って青森の人間はよく知っていますけど、関東に行ったらよくわからないわけです。冬には何に使うといいでしょう、夏はどうするのでしょうか、そういうことも教えていくと面白くなっていきます。天窗をつくっても意味がないのではないですか、という話も言われました。雪が降っている時も光は入ってくると話をします。晴れていなくても光が入ると教えます。北国の天窗は気をつけることがある、雪が積もり、水分をどうするかみたいなことを考えると付けた

くないわけです。そんな話も含めて一緒に勉強しました。かなりマニアックと思うかもしれませんが子どもたちは自然です。二重ドアって何で良いの？二重サッシって何でやるの？と、子どもたちに好きに発言させるとこう言います。ピアノがうるさくしないようにするには？と聞くと二重窓だと思いませんと。そういう時に教師として否定できないといけません。窓ガラスつけても隣のピアノはうるさいぞと。いくら二重窓にしたところで凄く重い窓にしない限り無理なわけで、二重にするということは間に何か挟んでいるって話をするわけです。これを特に小学生の5年生6年生の子たちはまじめに考えます。教科書に書いてないから楽しいのです。二重サッシって何をはさんでいるかという、わかった子どもたちは声高々に手挙げます。先生、空気ですと。寒い時に新聞紙にくるまるのは当たり前にある話だよって、服と服との間の空気が大事なんだよ、重ね着というのは着た服が毛糸だから以上に、間に空気が挟まっているからだよねと話をすると、子供はわかります。うちの窓って空気が入っているんだ、当たり前だけど、気付かれないままずっと過ごしているわけです。習ったこともないから教えられないじゃなくて、こういうことはいつも見ているから教えようと思えば教えられるはずなんです。

逆に涼しい授業もしました。気持ちよく安心して涼しく住むためにどんな工夫をするのかなと、子ども達一所懸命考えます。条件付けます。クーラーは使わないと。扇風機があるけど電気使うなど。子どもたちはすぐ言います。薄着すればいい、シャツ脱げば良いと。あるいは窓を開ける、冷たい飲み物飲めばいい、なんて話をするわけです。団扇がいい、風鈴がいい、カーテンを閉める。風鈴というのはなんで音がなるかわかるかって聞きました。風鈴を窓際につけて音が鳴って、今日はいっぱい風が吹いているなってことありますけど、もともと風鈴って部屋と部屋の中の長押のあたりに吊して、小さい家の中での小気候といいますか、風の動きを見るわけです。外で風が吹いていなくても住宅が北側から南側に向けて夏でも風が通り抜けていきます。通り抜けていくところを風鈴で調べると、ここは涼しい、風のみちだっというのがわかるわけです。そういう意味で言うと、昔の方々は上手にこの風鈴を使いました。クールビズとか打ち水ってことは最近の子ども達も知っていますが、アスファルトが多くなると打ち水できないよってという話もあるわけです。そういう時にまだ習わない言葉だから、じゃなくて、青森県のリビングリテラシーとしては、学校で習わないところであろうと、打ち水の話をして構わないわけだし、水蒸気が上がりにくくなってくるから、アスファルトは暑いのだという話をしても構わないわけです。教えることはいっぱいあります。

あずましい家は自分達で工夫して得るものです。僕があずましいという言葉初めて聞いたのは、東北大に勤めていた時、早稲田大学で鱒ヶ沢生まれの戸沼先生という方が出した本にありました。最初あずましいという言葉を見た時に、吾妻鏡の吾妻、我が妻かなといろいろありました。青森県に来て、住宅マスタープランを作る時にあずましい住宅という話をしました。すると南部の方ではあまり使わない、津軽だよと言われました。戸沼先生は、それは安住だと、安らいで住む、あんじゅうましいがあずましいになったのだと。そのあずましい住宅というのは自分たちで工夫して得るものだと教わっていくのがリビングリテラシーだと僕は思うのです。文部科学省の学習指導要領にもこんな文章が書かれています。最初に「主体的に」と書いているんですよ。主体的に営むことができるライフステージと住環境に対応したというふうに、しっかりと自分で見つけて、安全や環境に配慮して、なおかつ、住文化を継承・創造して工夫していきましょうということをやっている。僕は要領の中でこのように言えるってことはいいことだと思うし、このことが青森県の考えたリビングリテラシーって言葉そのものだと思います。作法とか歴史・やり方をしっかりと次の世代に継承していくもの、そのために今学ぶべきものをしっかりと考えながら地球全体の環境を考えていきましょうっていうのが大事で、文科省の家庭科にもこういうことを書いてあるわけです。ライフステージの問題、居住観やライフ

スタイルの問題、住環境の問題、防災の問題、まちづくりの問題、全部関わってきます。これまでの住教育について先生方に聞くと、バリアフリーの勉強を一時間させましたというのが一般的でした。先生方が悪いわけではありません。時間がないのです。説明しようとしてプロにお手伝いしてもらおうわけにもいかないし、実際に学んでないし、でも住まいってというのは一個の家じゃなくて、地域であり、地域と地域の関係であるということも教えていくとすると、まちを含めて全部関係してくるのだけど、これまでの住教育では間取りをちょっとやってみようというのが精一杯でした。精一杯だけ一時間二時間の授業で終わるわけもないし、工業高校にでも入らなければ家の設計をすることもないわけです。僕は今教育学部で住宅を教えています。今日の午前中も住宅の設計の講評会をしてきました。どんな風にしてご飯を食べ、どんな風にして家族と語り、どんな風にして子供を育てていくかということの気持ちを表した家をつくるわけです。作品に副題をつけなさいというと、安心して住める家とつけた子もいますし、温かい家って子もいるし、そういう表現をしてくるわけです。建築の技術を知らなくても、暖かい家というイメージがあるんですよ。自分で自信持って言える人達を育てていって欲しいわけです。その意味からいうと、今やろうとしているリビングリテラシーをしっかりと進めていくことが大事なんだと思います。

特別講義「日本人の住居観を考えてみよう」をちょっと見て下さい。これは先進国における住宅の耐用年数です。日本は飛びぬけて低いです。30年平均です。一番長いところでイギリスが141年です。欧米が大体80年から90年です。いくらなんでも日本があまりにも短かすぎると思います。この理由を大学のテストで出したことがあります。一番多かった間違いは、木造だからでした。修学旅行で法隆寺行っただろうと話をするわけです。木造だから30年しかもちませんということはありません。これを主婦向けの公開講座でやると一発で分かります。どなたか理由分かりますかと聞くと、住宅ローンを払い終わった時がちょうどいいところです。払い終わったぐらいがちょうど自分も退職して、子ども達は東京にいつてしまった、家だけ余ってしまった、どうするべと思うと貸せるものなら貸したいけど、転売もできないし、とって空き地になっていくパターンが日本は多いわけです。

日本の持ち家の面積は122㎡、借家の面積は45、平均で90ちょっと、三世帯の最低居住面積は39です。アメリカは借家で118、持ち家で168。アメリカと比べても仕方がないので、ヨーロッパと比べてみてください。イギリスは持ち家面積が87です。日本より小さいです。借家面積は74です。そう変わりません。びっくりするのは、持ち家と借家の面積の差があまりなくて、ありすぎるのは日本です。イギリスは差がない、三世帯の最低居住面積を61と決めているわけです。日本は39です。私達はいつの間にか借家というのは持ち家まで我慢するところであり、一所懸命頑張ってお金を稼いで、そして家を持てば良いのだと言うことを小さい頃から鍛え込まれているわけです。アメリカはともかくとして、ヨーロッパの中でもイギリスは質素です。質素とはいえ、僕がもしどこに住んでもいいと言われたら、イギリスだと思います。借家住宅が一番豊かです。なおかつ持ち家住宅とあまり変わらないで、最低居住面積も61としています。こういう考え方が日本のこれまでの居住観とか、これまでやってきたことを反省するときこのような数字を見ると結構ショックを受けるわけです。

日本の住宅市場の一つの問題は持ち家政策でした。もう一つは、最低居住水準というものをつくって最低限これだけあれば良いとはいえ39。ヨーロッパと比べてもやっぱり低いわけです。イギリスが日本の住宅を見てウサギ小屋と言ったわけですが、面積ではイギリスの方がよっぽど狭いんです。私達はもしかしたら家に住むという時に方法を教えるだけじゃなくて、家ってどういうふうに使っていくか、どういうふうな住まいの大きさがいいのかみたいなことも、ちゃんと学ばないと、お金ができれば、宝くじに当たったら一戸建てをみたい意識だと日本の住宅は伸びていかないと思います。

昔、公営住宅というと、簡易耐火構造の平屋と共同建てのエレベーターを付けなくても良い4階までのものがいっぱいありました。こういったものが昭和30年代にいっぱい建てられて、それが全国で住み替えしなきゃいけなくなってきたわけですね。中におけないので、みんなミニハウスを買ってきて、子ども部屋にしたり倉庫にしたりしていました。駐車場なんてものはもともとありませんでした。みんな路上駐車でした。「愛車へのいたわりしめすドアロック」なんて書いていますけど、こういった集会場がありました。集会所は何に使うかと聞いたらお通夜に使うというのが普通でした。

実はヨーロッパは公営住宅の考えが全く違います。パリの公営住宅は有名建築家の設計です。リカルド・ボフィルという人がつくった劇場・宮殿・凱旋門という公営住宅、あり得ない名前です。この建物、コマーシャルで見たことないですかね。外国人が立っていて、ジェミニという車がここにグーっと出てきて、そして公営住宅をバックにして、車のおしゃれなコマーシャルが話題になりました。

これはロシアの建築家のパリの公営住宅ですが、世界的コンペの目的は、学校に来なくなった子どもを学校に行かせるための住宅でした。真ん中が小学校。パリではこれをカマンベールと言っていました。カマンベールチーズに似ているからです。ここにみんな住んでいるんですよ。日本の公営住宅は我慢してお金をためて持ち家を持たせようって話で、それに対し公営住宅に一生住んでいる方々が普通にいらっしゃるヨーロッパでは長く住みこなしていくことを教えなきゃいけないわけです。

イギリスのテラスは基本的にギリシャ建築とかローマ建築みたいな雰囲気を出しています。家賃は1カ月15,6万。考え方が違うのでしょうか。家を持つことに目的を持っていくのか、住んでいくことに目的を持っているのか、まずはその違いです。日本の居住観は世界でも特別だとよく言われます。

東北地方は特にそうです。住宅は持つものであると。欧米では住宅は上手に住むものです。借家だろうが持ち家だろうが、どちらでもいいのです。一つの家族が140年住んでいる訳ではなく、借家で、自分が違う住処に行った時にまた違う人が入ってくるわけです。家さえちゃんと作っておけば、空き家になってもどんどん入ってくるわけです。それが物理的に140年持つ。日本では住宅は持つのにお父さんとお母さんしかいなくなっちゃったからもういいって話になってしまう。

借家が100年以上持つイギリスは、上手に使いこなしているからできるわけです。持続可能な住まいの空間をしっかりと教えていかないといけないと思います。日本の場合は、物理的耐用年数よりも社会的耐用年数の方が先にきてしまう。だから、リビングリテラシー、どう住まい、どう生きていくのかってことをしっかりと学んで、今からでもこの社会的耐用年数が長くなっていくような生活を私たちは子供たちに教えていかなきゃいけないのだと思います。

三陸の津波被災地でそれを知らされました。災害危険区域というのは2メートル以上の津波が来る可能性があるため住んではいけない区域です。土地を持っていても値打ちもなく、地価を上げるために頑張ってきた事業者も住んでいけなくなってしまうと土地が取引されませんから、頼むから国に買い取ってくれとなるわけです。ほとんどの被災地では、国が買い取り、自治体が持って定期借地権で人に貸します。僕は大船渡の仕事をしていますけれども、かもめのたまごも大船渡のホテルも、スーパーもみんな土地を取られました。かもめのたまごだって工場やお店は全部大船渡市の土地です。土地をもって仕事することの意味を、本気で企業の人も考え始めました。彼らは今、20~30年の定期借地権にしています。みなさんそんな長期間の定期借地権、借りてどうでしょう。10年後どうなるか全くわかりません。企業だってそうです。20年経って続けたければまた借りる。つまり彼らは自分の地価を上げるために土地を持っていくことに頑張るのではなくて、かもめのたまごをがんばるわけです。所有よりも利用が大事だってことをみんなわかってきました。本気で利用の仕方について、マネジメントの議論をしています。かなり大変なことがありましたけど、彼らは弘前・青森・八戸よりも15年



以上早く土地の考え方が変わりました。上手に使って続けていこうという話です。住むのも一緒のはずです。

リビングリテラシーを企業も考えるわけです。私が手伝っている大船渡では彼らはもう土地を持っていません。まちづくり会社としてキャッセン大船渡というものをつくりました。JRも線路を全部取っ払ってバスが走っています。BRTといいます。スイカも使えます。元の電車の路線を走ってきますから、対向車はバスしかきません。すごく便利なバスです。定時で走ってくるし前の駅を出ましたみたいなのが出てきます。津波で何もなくなってしまいました。本当は大船渡駅があるぐらいですから、ここが中心市街地でした。中心市街地が何もなくなったまちです。僕たち青森ではそんな悲しいことを考えなくてもいいのです。逆に言うと、何もないところだからこそ彼らはこの土地を本気で考えました。ここに店は入ってもいいけど、住むことはやめようと。土地は持たなくていい、市役所に持ってもらってそれを貸してもらい地代を払おうと。みんな悔しいと思います。住民がもともと持っていた土地に地代を払うわけです。しかし、地代はその前の年まで払ってきた固定資産税と全く同じ額にしました。毎年払うお金はいっしょです。それで新しいまちづくりが始まっています。

これが地震の直後に僕が大船渡に行った時の写真です。こういう状況の中で何ができるだろうという時に、大船渡の人たちは考えた。土地は全部役所が持って、やりたい人にいっぱい仕事をやらせるべえと、もともと土地を持ってない人でもやってもらおうと思った。こういった発想というのは、僕は、リビングリテラシーに通ずるところがあると思うわけです。彼らはそこで自分たちが町を支えて、場を元気にしていこうと考えて、ちゃんとお金を考えて、どうやって地代を払って進めていくかを考えました。ものを持ってないからできるわけです。ものを持っていると持っている財産をどうやって高めていくかということしか考えません。ものを持っていないからこそ、場を元気にしたい。住むこともそうです。住環境を持っているのではなくて、関わっているからなんとかしたい。そういう風な生活ができるようにしていきたいということが、リビングリテラシーで気付くべき能力だと思うわけです。

彼らは本気で考えてくれました。まちづくりをしていく時に最初につくることじゃなくて、育てることだと考えてくれたのはうれしかったです。行政だけでなく住民も一緒にやってみよう。一番の地権者は市役所ですが、住民、事業主、地権者みんな頑張りながらマネジメントしていきましょうと、そういうことを被災地ではいち早くやっています。私たちは地域の中でもものをつくってきました。つくってきたものをもういっぺんしっかりと育てていけないといけない。リビングリテラシーというのは、住むという言葉を通して私たちが築き上げてきた住まいの環境をしっかり次の世代に受け継がせるようにしていくという話になります。そのためにも、子どもの頃から学ばなきゃいけない。

そうです、マネジメントの時代の住教育なんです。ディベロップメントの時代の住教育は、やはり違いました。どういうふうに住宅を持つのか、どんな方法があるのか、様々勉強してきました。しかし、マネジメントの時代の住教育は、どうやって住宅を持つかの勉強じゃなくて、どうやって住んでいくのかってことを本気で考えなきゃいけないってことです。

ストックを再生して活用する時代です。そういう意味で言うと、つくるプロが一番苦手な、計算のできない自分たちの空間を育てていく発想。これは何度も僕は言ってきました。まちづくりと子づくりは一晩でできるけど、まち育てと子育てはエンドレスであると。まちを育てていくための住教育、それはずっとエンドレスで楽しんでいくわけです。子ども達を育てるようにしながら、地域を育てていく。地域を育てていきながら、自分の子供を育てていきながら、リビングリテラシーというような言葉で表現できるような住まい方を育てていくわけです。

そういう意味で言うと、住環境のマネジメントこそがまち育てだと思います。住居を学ぶセンスは、

何も家のつくり方を教わるのではなく、家ってこんな風に住むとこんなに楽しい。こんな風に住むと、そんなに寒くない。もしかしたら私たちの家って、ちょっと温度が高すぎかもしれない。いろんなことを勉強しながら、そのセンスが重要な武器になるはずだと思います。

リビングリテラシーは、青森の住まいを育てていくことだと思います。このカタカナ、すごくなじみにくいかもしれません。今日の最初のスライド見た時も、「リビリテあります」なんて書いていました。冷やし中華のマネだと思いましたけど。でも青森県がせっかく言葉を作ってくれたので、あえて言いたいと思います。リテラシーなんて難しそうな言葉だけど、リビングのリテラシーをみんなで考えながらそれを学ぶ、つまり守るためのリテラシーじゃなく、育てていくために必要な、次の時代につないでいくためのリテラシーが大事だということをお話して、実際にそういった事業に関係することを研究している松村さんや、それから木村先生には学校の今日の授業の話などをしていただきながら、後半、リビリテの内容についてお話をしたいと思います。

今日僕は、住宅で学ぶべきことを、住まいの何とか百科みたいな、昔あった住教育の講座では、家の持ち方、ローンの借り方、そんな話を中心かもしれないけど、今必要なことは、どうやって古い住宅を住みこなしていくのかみたいなことを本気で考えていく時代になっているのだということをお話して、今日の僕の授業を終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

## 5 パネルディスカッション

◇北原教授

後半を始めたいと思います。今日のタイトルは「青森県住まい・住環境学習指針シンポジウム」、指針のついたシンポジウム初めてですけど。かたいことはことしたくないものですから、住まいをどうやって学んだら良いのだろうという話をリビングリテラシーという言葉で言いました。判断力や生きる力ということを松村さんと木村さんの話を聞いたうえで、議論できたらと思っておりました。松村さんとは随分長い付き合いでして、昔から住教育をやるということで北海道が雪のことや寒い所の家について本気で道立でしっかり研究している。僕はびっくりしたんですけど、全国にそういう研究所無いんですよね。しかも格好良い名前なんです。僕が初めて松村さんに会った時の名刺では、寒地研でした。寒い研究所というので。雪の懇談会で木村守男知事の時でしたけど、北海道は持っているけど、青森も雪の研究所をつくるべきだと言ったら、うん金があればやると言われたただけでした。それ以来北海道に毎年行って、ただ単に旭川のジンギスカン食べたいから行っているわけじゃないんですけど、そういう良い思いをしながら勉強してきました。いろんな教材を見せてもらいました。実は去年まで委員会に研究所の方からも馬場さんに関わってもらっていたんですけど、おめでたということでお子様の方のリテラシーが大事だということで、今回は上司がちゃんと来てくれました。しっかりとお話を聞きたいと思います。木村さんの話と松村さんの話を僕らも一緒に勉強させてもらったうえで議論したいので、まず松村さんからお話よろしくお願ひします。

◇松村氏

ご紹介いただきました松村でございます。全国の都道府県で唯一、住宅・まちづくりの研究所を持っています。もともとは洞爺丸台風で森林がやられまして、なんとかそういう状況の中で住宅をつくらなくてはならないということで、コンクリートブロックで住宅をつくると、そこがスタートです。それは昭和 29 年ですね。それ以降、住宅・まちづくりの研究を行っているところであります。私からは、「地方における住教育で必要なこと」ということで、特に、大都市と田舎をちょっと意識しています。今回は、どちらかというところと田舎で何が必要かというところをお話できればと思います。

見えない価値に気付くということを後ほどお話させていただきますが、まずは北海道がこれまでどんなことをやってきたかということをお話したいと思います。私はもともと研究所だったのですが、平成6年に北海道庁の建築指導課に派遣になりました。2年間の派遣だったのですが、その時に住教育を道としてやるべきだというのを立ち上げようとしたんです。まず建設部の予算担当のところで、これは知事の任期中に成果が出るのかって聞かれたんですけど、それはできませんよと。できませんけれど知事がいなくなるときに、ああ、あの事業立ち上げてよかったなって言うかもしれません。と言ったら書類投げられまして、それでだめかなと思ったのですが、財政部局の人がピンときてくれて、この事業がスタート出来ました。あと4年間は体験学習、ある意味イベントですが、土曜・日曜使って学校以外の場所に子ども達を集めて、手探りでスタートしました。

問題として1年に1カ所やってもどうにもならない。それからこの事業が無くなったら止まってしまうということで、どうやって継続していこうか、もっと普及・展開の方法はないかということで、学校でやってもらうことを次に考えました。そのためにはやはり教材がいるだろうということで教材を作りました。それから、具体的にどんなことをやったらいいのかっていうプログラム集を考えましたが、反省しています。このプログラムは研究所で作ったんですね。わかっている人間が作るんですよ。そうすると非常に分かりにくい。わかりやすくするためには分かんないデザイナーに作ってもらう必要があったと思います。それから、紙の教材だけではなく、結露はどうして起きるのだろうということが分かる教材とか、断熱材が厚いと本当にあったかくなるのだろうとか、体験的に実感できる教材も作ってきました。それから、まちなみも考えよう、間取りとかも含めて、まちなみを考えられるように、ペーパークラフトで家を作れるものをつくって、それをいっぱい並べていろんなことを考えるということをやってきました。それから、当初は総合学習がターゲットだと思っていたのですが、その後、総合学習の時間が削られていくなかで、次に目を付けたのが家庭科でした。家庭科教員を対象とした研修会をやってきたのですが、この中で私が一番面食らったというか悩んだというか、ある研修会で質問されてですね。これやるのは面白そうだけど、やった結果どうやって成績つければいいのかと聞かれて、正直びっくりして、例えば暮らし方とかライフスタイルみたいなものに正解はありませんよね。正解がないというか、正解がいっぱいあるというか。答えが一つではないので、確かに成績つけにくいなど。まさしく先程から出ているリテラシーでその判断をするためにどういう思考をしてその答えを導き出したかというプロセスの部分が極めて重要なので、そこを評価したら良いのではないかと答えたんですけど、これはなかなか現場では受け入れられにくかったと思います。とはいえ、北原先生もおっしゃいましたけど、家庭科の住の時間自体が非常に少ないこともあって、次に建築士会との連携を考えました。各地域に校長会があるのですが、上手く反応してくれたところはトップダウンでやりましようとなり、うちと地元の士会が組んでやるというやり方もやってみました。それから、市町村がそれをやらなきゃいけないねって言ってくれた場合には、その教育委員会が中心になって、我々が少し動いて建築士会とか地元の建設業を動かしてやるというようなこともありました。それから、住生活基本計画を積極的に市町村にも普及して、住教育を位置づけようという動きもしました。それから、黒松内町というところの中学校が耐震アウトだったので改修時にリノベーションすることになって、学級数も少なくなっているのでも2階部分を大きく削って、減築して耐震する改修だったのですが、その事業を使って住教育や環境教育もやってきました。先生も入ってこの建物でどういう環境教育プログラムを考えるか、そのプログラムを考えるところも、計画・設計に組み込むというやり方もしていました。そういう形で、最初は小学校、そして中高というふうに移っていったのですが、いくつか課題を感じました。一つは、道が教材を作りますが、ある意味オール青森県、オール北海道の教材の限

界ってありますね。地域のものや文化ってだいぶ違いますので、そういう必要性があるんじゃないかということ、学校現場だと先生にノウハウがたまっていくのですが、前の年の3年生がやったことを踏まえて次の年の3年生がやれるかというとかではなくて、かなりブチブチ切れるようなことです。

防災の方では、ある町でGPSを持ってもらって、何時に津波が来たとして防災訓練・避難訓練をしたんです。GPSでログが残っていますので、浸水や津波のシミュレーションができます。あと、避難訓練やった後にこういうものを作りました。こちらが地震だよ、津波来るよって言ってから10分後に避難開始する場合。こちらが津波くるよって言ってすぐ避難開始する場合。シミュレーションしますので、ちょっと見ていただきたいのですが、いま発令されて川に遡上してきているところです。こちらもどんどん逃げ始めているところで、こちらは10分後です。こんな感じです。やがて津波がやってきます。やってきました。一気に来るんですけど、そうすると、はっきりとどの人が逃げ遅れてますみたいなことが分かってくる。こうやって、その地域、地域でやると、もの凄リアルで、それはそれでどうかということもあるんですが、そういうものも作り上げていくと地元で使えるんじゃないか。それから、積み上げていくって意味では、安全マップと言って一時期よく作っていたのですが、こんなのもGISを使い、子どもたちにアンケートとして、危ない目にあつたところはないかということをやっていく。積み上げることによって、これだけ交通事故で危ない目に遭った人が減りましたとかっていうことが見えてくる。GISを使うと暗がりとか、1人で歩かなくちゃいけない区間はどこかとか、どんどん応用がきくようになっていきます。

それから、子どもだけじゃだめだよということ、特に田舎ということ考えると、高齢者が非常に今問題になっています。目に見えない価値というものに、もう一回気づく必要があるんじゃないかと。ある意味、地域の誇りというようなものです。これは、アメリカと日本の幸福度、横軸が年齢で縦が幸福度ですが、アメリカでは40ぐらいまで落ち込んで、あとは年取るとにずっと幸福度があがるんですね。日本は右肩下がりで下がってくるんです。これはかなり不健全ですよ。日本は年取れば取るほど落ちてくる。アメリカはどうしてこういう風になるかということ、地域に居場所があって自分が地域で活躍できる場があるということが大きな理由だと、もちろん、必要条件としてある程度お金があつて、健康であるというのは必要条件なんですけど。都会よりもこれをあげるのには田舎じゃないかということで、この住教育みたいなものをどんどん田舎でやるべきではないかと思っています。田舎の状況を言いますと、持ち家を持ったが故に進めなくなるそうです。田舎の町では60歳ぐらいで転出する人がいっぱい出てきている。戸建てに住んでいて、どちらかがなくなった時に、除雪も大変だと。だけど、町内にそういう除雪もしなくていい集合住宅もない。しょうがないので札幌や東京の、息子のところの施設に行くとか老人マンションに行くとか、そういう動きが顕著に出ているわけです。田舎の人口減少メカニズムは若い人が出ていくことが共通なのですが、年寄りが出て行くのはどうやっても止めたいというようなことで、こういう発想をしたわけです。具体的には、やはり田舎のねずみと都会のねずみのイソップがありましたけれども、その顔の見える関係をもう一回見直すべきではないかというようなことが根底にあります。こちらではどうか分かりませんが、都会では今餅つきができなくなっているってご存じでしょうか。何でできなくなっているかということ、保健所に問合せするとやめて下さいって言われるんですね。衛生上担保できないということなんですけど。不特定多数を集めてやろうとするってことですよ。だけど顔の見える関係だとそんなの気にしなくていいよって言えるわけです。考えてみると、経済成長の時代というのはどんな田舎も都会になりたい病にかかっていたのだと思います。都会にならないと幸せになれないと、そういうことで住んでいる田舎の地域価値を失ってきたと私は認識しています。

集落のことを研究して集約していかなければいけないんじゃないかと漠然と考えている中で、交通も利便性もスーパーもないような田舎のおばあちゃんにお話を聞くと、めちゃくちゃ幸せそうなのですよ。不便じゃないですかと聞くとなんも不便じゃないよというわけです。何とかしなきゃいけないと思っても、どうやったら利便性は悪い、医療まで何分かかかるのでここは住むには相応しくないのではないかと、立地適正化計画も今さかんにやっていますけど、そういうものだけで計測・評価したらいけないのではないかとということで、人のつながりとか物のつながりとかを徹底的に聞いていくんです。わかったことは、この方 NPO 法人の役職の方なんですけど、ものすごく人との関わりの線がいっぱいあるんですね。うちの職員にやらせてみると人の線は少ないが、お金の動きはある。旭川はあまり都会ではないですけど、全てお金が介在してサービスを手に入れるし物も手に入れる。お金が介在しないやりとりというのは、家族だけです。ところが田舎に行くと、山菜もらったからあげるとか娘がお菓子を送ってくれたからあげるとか、そういう動きがいっぱいあって、お金が介在しない線が多い人はどうやっても幸せそうだとすることがなんとなく分かってきました。

戦後、家族のつながりに頼ってきて、それ以外はどうしたかという、行政に頼んじやったんですね。行政もお金があったから。これからは人口が減っていきますし、行政が今まで通り全部やるというのも間違いなく無理です。そうするとやはり、顔の見える関係をうまく使っていかなきゃいけないんじゃないかと。先ほど言った、何かあったらどうするという餅つきの話です。誰が責任取るのかに都会ではめちゃくちゃおびえています。何かあったらって何が想定できんのかな、大丈夫だよってというようなことをもう一回考えるべきではないかと。都会と田舎を比べてみたのですが、決定的に違うのは、顔の见えない不特定多数という対象です。そうすると公共はやりやすいです。密度もありますし、効率が極めて重要になりますし、手間というものは排除すべきことになります。ところが、田舎に行くと顔の見えるコミュニティですので、実は手間というのは、コミュニティを醸成するすごいツールになったり、ちょっとしたビジネスになる可能性があるわけです。効率もそんなに追及しなくてもやっていけるというような、良い意味があります。セーフティネットに関しても全てお金です。こちらはつながりでセーフティネットをやる。何かあっても自己責任だと。田舎でも今、ICT の波が押し寄せています。見守りを ICT でやろうというのがありますが、気をつけなきゃいけないのは、ICT というのは、まさに都会形、不特定多数でやっつけるのはめちゃくちゃ得意なんです。例えばウーバー御存知でしょうか。不特定多数のタクシーに乗りたいた人がいて、不特定多数の運転手がいるようなところで効果があります。それを北海道のたかだか 3 千人の街に導入した町があるのですが、何が起こるかという、ICT はコミュニティがなくてもできるものですので、コミュニティがあるところに持ってくるとコミュニティが落ちてくるんですね。衰退させる力を持つてる。全てを否定するものではありませんが、そこは気を付けなくてはいけない。これは伝えないと気がつかないんですね。ここに気が付きだしているのは、移住組です。外から入ってきた人っていうのは、この辺敏感に感じています。それで最終的にどんなことに行き着くかっていうと、大人の住環境教育ってことで、自分たちのことは自分たちでやろうよと、地域運営自分たちでやろうよというようなことが起きてくるのではないかと。先ほどの高齢者の幸福度がありましたけど、やはり高齢者が地域で活躍する場がないといけません。決して大きなお金を稼がなくても大丈夫なので、こういうまちまかない会社みたいなものを作っていくと。ネタとしてはいろいろあります。例えば、空き家の問題がありますが、田舎では宅建業者がいまないので、これやっちゃえばいいんじゃないかということと、派遣会社が都会にはありますが、田舎には季節雇用があるんです。北海道では、夏、農家が忙しく人がほしい。だけど冬は暇。冬忙しいのは除雪です。除雪の手が足りないので季節雇用が結構あるんです。それを個人で、夏は農業、冬は除雪やろう

といっても、雇用が安定しません。田舎版の派遣会社をつくる。派遣会社が町内の全ての季節雇用を集めるわけです。それで事業者からお金を集めて、それをチャートにすると何人、十何人分の年間雇用が生まれる。そういう発想です。それから、ちいさな役場。いろいろやられていますけど。こんなものをネタにして、まちまかない会社を田舎でやっていくというのは、この住教育を進めていく上での行き着く先、到達点ではありませんけど、そんな展開になっていけばいいなと思って今取り組んでるところです。以上です。ありがとうございました。

◇北原教授

ありがとうございました。では、続きまして、現役で高校の先生やってらっしゃる木村先生から、学校の授業での試みを教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

◇木村氏

私からは、青森県の住教育ということで、教育現場の視点から、副読本の作成と住生活の出前授業の試行についてお話しさせていただきます。県から、住教育の充実には、技術・家庭科における衣食住の学習項目のうち住生活に関する学習が不十分だと課題を突きつけられました。でも、実際の私達は教育現場にいる方としては精一杯やっていると、やっている中でも、青森県の現状に合った住教育ができていくのかということについては、もしかすると不十分だったのかなと少し考えさせられるような課題を突きつけられたということです。と言いますのも、家庭科の教科書ご覧いただいたことありますでしょうか。教科書というのは全国どこでも使えるように作られていまして、決して青森県の子ども達に対してわかりやすく作られているかということそうではない。どちらかということ都会の子ども達に合ったような形に作られていて、雪のことですとか、寒さ対策のことですとか、そういったことにはほとんど触れられていない。確かに暑さ・寒さという言葉では表現されていますけれども、青森県の実態に合った寒さや雪についての内容があるかと言われると、そういうところが不十分だということが実際にある課題となっているところです。

そして解決の方向性としては、住生活全体を学習環境として子どもの考える力や生きる力を育むという住教育の実践が必要ということで、私たちワーキンググループメンバーはまず文科省から出されている学習指導要領の中身を確認しました。小学校の家庭科では、住まい方に関心を持たせること。小学校では身の回りのことから勉強していきますので、整理整頓や掃除の仕方、季節の変化に合わせた快適な住まい方を学んでいきます。中学校になりますと少し範囲が広がり、地域のことに目を向けて住教育の勉強をしていきます。家族の中の住空間、家族でいる場所、自分1人でいる場所がある、個の空間と共有する空間というものがあるということや、住居の基本的な機能を学びます。家族の安全な住まい方を室内環境として捉える学習をするのがメインとなります。東日本大震災以降、地域の安全ということで、地震が来たら住宅の中でどこが危険なのだろうかというような安全対策も授業の中で取り入れるのが中学校の学習内容です。高等学校ではもっと範囲が広がっていきます。高等学校の家庭科では、個人としてどういう生活をしていったらいいのかということを中心に学ぶため、住居の機能、自分が担っていく住居。自分が経営していく住居。それから地域との関わり。自分1人で生きているわけではなくて、地域とのコミュニティなどを意識させることや環境とも関連させて学んでいくことが高等学校の内容となっています。このような小学校、中学校、高等学校の内容にマッチし、さらに青森県の課題を解決できるような教材を検討し、作成していったという流れになります。実際に、小学校、中学校、高等学校の先生方でどういった授業が実現できるか、青森県の子供たちに合った内容になるかということを検討していきました。その結果、3月に副読本が各学校に配布され、ウェブ上でも配信されるということにつながりました。

その中で私が学校で実践した副読本の活用と、専門家による出前授業について紹介させていただきます。一つは、物件探しを通して平面図を読み取り、自分の生活を描いてみようという授業です。特に私の高校では8割が進学します。それから、1割強は公務員や一般企業に就職ということで、子どもたちが卒業後1人暮らしをする場合が多いものですから、それを想定した物件選びを実践する授業を行いました。専門講師として、青森県宅地建物取引業協会の方をお呼びして、物件選びのコツや、気を付けなければいけないことをアドバイスいただくという流れで行いました。もう一つは、ライフステージごとに変化する住要求に気づき、住まい方について考えるという授業を行いました。北原先生のお話の中でもライフステージを意識した住まい方というのはどこでも習うことではないと、意識させていく、ということがリテラシー向上につながるということでしたので、ライフステージを捉えさせるような授業を考えて実践しました。住む人の暮らしを大切にされた建築士さんからお話をいただきます。年齢に応じた住要求について、生徒が考えていきます。遠い年代のことを子ども達は考えにくいので、まずは近い年代の二十歳の自分を想像して、どんな環境になっていて、どんな住要求があるだろうかということを考えさせます。次におじいちゃん、おばあちゃん達がだいたい60代前後ですので、自分がその年齢になったら、どんな住要求があるだろうかということを考えさせ、子ども達の考えを学級の中でシェアし、そのことについて建築士からのアドバイスをいただくというような2つの授業を行いました。副教材は、ライフステージに応じた住居の選択ということで、物件が例示されていて、物件を自分はどのような理由で何を選んだかというものを生徒たちに考えさせます。それから、専門家からアドバイスをいただき、自分たちで選択した理由が適切だったかどうかということが、専門家の話によって適切だった、またはこういう判断の仕方もあったということが分かり、専門家の方のお話によって学びが深まり、まさにリテラシーが向上していくという授業でした。私が実践した6月にはまだこの副教材のデータがありませんでしたので、宅地建物取引業協会さんからお借りしてきた冊子の中から、青森市の不動産情報を使いまして、実際に子供たちに考えさせました。この地図も青森市の地図になっていますが、例えば、この学校に行く場合に、どこのアパートを選べばいいのか、子ども達に実際に物件情報と地図を照らし合わせて考えさせる授業を行いました。子ども達は自分の家に近い物件を見つけると、このアパートの家賃ってこれくらいするんだとか駐車場代取ってるんだとか、いろんなことに気づき出して、住居そのものだけでなく住まい方にも興味を持ち出したという凄く面白みのある、大変盛り上がった授業となりました。それからもう一つの授業は、ライフステージに合わせて住居を考えていくというものです。講師から、ライフステージごとに住要求は変わっていくことを事例とともにお話をしてもらったあと、自分たちが想定した20代の住要求、それから60代になってからの住要求とはどのようなものだろうと考え、また最後に講師からアドバイスいただいて、自分たちの将来の住居選びに役立てていくという授業です。実際に授業した時の物件情報がこのペーパーなのですが、この中から情報を読み取って自分の考えている住要求が最適なものかどうかということ子ども達で真剣に話し合っています。こんなに前のめりになって話合うということはなかなかないです。作業ではなく、自分たちで考える、この姿が先ほど北原先生が仰っていた主体的な姿なんです。それから建築士さんのお話はなかなか身近ではないので、そういった話にも食い入るように話を聞き、自分たちで住要求を考えていくということを行っています。このような子ども達の姿によりそれが証明できたかと思えます。実際に子ども達がどういう感想書いたか、一部持ってまいりました。物件情報を読み取って選んでいく授業では、収入や交通手段など自分の生活を考えて物件を選ぶことが大切だと気づき、自分で選ぶときに役立てたいです、などというように自分が判断する基準を少しずつ専門家のお話の中から得ていったということが分かります。また、高校生だとまだ見た目で、これは白い壁

できいだからとか、何階建てとか、最初は見ているんですが、専門家のお話を聞いて必要となる判断の材料を得ていったようです。ライフステージごとの住要求の授業では、子ども達はこんなことを書いていました。住居は子どもが生まれてから晩年期までの5つのステージで捉えることができる、ということを知りました。家族の状況に応じた住まいがあるとわかって、自分がそうなったとき見通しをたてて住みやすさを追求したいです。まさにこの住まい方のところを捉えて子ども達は学習をしたということになります。

このような授業を実践して、子ども達の変化を確認してみました。ビフォーですが、4月に教科を学ぶ時にガイダンスを行うんですね。家庭科は小中学校で学んでいますので、中学までに学習する内容や自分でもうできるようになったことを書いてもらうアンケートを取りました。1学年241名の中で、一番多かったのがちょっとした料理です。自分で作ってみるし、洗濯の仕方とかちょっとしたボタン付けなど、食や衣の内容が多いです。それから住生活に関する内容はどうかという、小学校の時に学ぶ掃除とか空気の換気の仕方などが3パーセント、環境に関する学びというのは家庭科だけではなくて、理科や社会、総合的な学習の中でも行いますが、環境、リサイクル、節電、ゴミの分別といった項目もありますが、全体で見ると7パーセントしかいないというのが春の段階です。それから、興味のあるものはなんですか、自分で学んでみたいことは何ですかとアンケートをとりますと、4月の段階で、物の整理や部屋の模様替えをやってみたい、また、住まいの選び方に興味があるという子もいます。家のコーディネートや平面図を書くこともやってみたい、これらを合わせても6パーセントです。興味はあるようすがなぜ低いかというと、小中学校では学ぶ時間が少ないから、考える割合も少ないということです。そして、実際にやってみた後です。12月に振り返りを行いました。4月から12月までに学んだ内容で印象に残ってるもの、今後の生活や将来役立つものはなんですか、と問いました。すると子ども達は、建築士、住まいの授業、すごいためになった。将来役に立つ。それから物件選びの授業すごくよかった。自分で選ぶ時に困らないという意見が多く、合わせて40パーセント。低く見えますか。高く見えますか。これまで51時間授業やってるんです。他は6,7時間ずつやってるんです。これはたったの1回で4割です。1回専門家の方をお呼びして、住まい方についてきちんと授業を行うと、これほどまでも、子ども達は生活に役立てたい、将来役立てる、と覚えているんです。私はそのほか49時間、いろんなこと教えているのですが、あまり印象に残ってなくて、これはちょっと頑張らないといけないと思わせられる数値です。いかにプロのお話が生徒の心に届くかということも証明できたかなというふうに思います。副産物もありました。総合的な学習と言って、キャリア教育とか体験的な活動も含めて総合的に学習することで子どもたちの学びを深めていくという時間です。探求活動を11月から1月まで行いました。それぞれの系列があります。13系列のうち2系列が住に関することです。建築士やインテリアコーディネーターに興味をもった子たちもいて、たった12名とカウントしますが、これはかなりの比率ではないかなと、今回の授業の成果としてみています。それから、家庭科の中で課題解決学習を行っています。プロジェクト学習なのですが、自分の家で学んだことを生かして課題解決してきましょうという宿題があります。自宅の整理整頓とか、家族の生活を考えて家族が住みやすいように模様替えをしたということをして4分の1の生徒が実践したということで、今回の授業の成果というのが非常に見えたのではないかと考えています。今後に向けてですが、副読本がせっかくできましたので、その活用促進を図っていくこと。これほど効果があることを私も含めて伝えていかないといけないと思っています。また、専門家の授業に関しては、学校現場では専門家のリストにある方を頼ることになるので、リストの充実が必要になってくるかと思っています。また、リストが多ければ多いほどいいです。私は6クラス受け持っているので、講師の方に6回来ていただいて6



回授業してもらい、本当に助かりました。時間調整して、この日は2時間目、3時間目なので10時半に来て下さいとか、今日は午後なので1時過ぎに来て下さいなどをお願いをして授業を実現しています。ですから、そのリストの拡充が確実に大切になるかと思えます。それから、今回行ったように関係機関との継続的な連携が、これからますます必要になるかと思えます。改善事項があると思ったのは、打合せにかかる時間を計画とすることと、地域生活に応じて、津軽と南部では気候も生活の仕方も違いますので、そういった改善も必要かと思えます。また、学習指導要領もどんどん変わってきますので、その対応もこれから考慮すべきと思っています。私からは以上です。

◇北原教授

ありがとうございました。松村さんには、これまで北海道の先進的な見えない価値に気付くための様々な取り組みをお話いただきました。木村先生の話はまさにリビングリテラシーの1年目として、かなり先進的なことをやってきたということについて、実感を持った言葉として話を聞きました。残された時間が30分ほどありますので、今回のこのリビングリテラシーという青森が住まい方・判断力・生き方みたいなことを進めていくことに対してこれからの課題というか、エールの意味を含めまして、お二人と一っしょに話をしていきたいと思えます。最初に、松村さんにお聞きしたいんですけど、今日のタイトルに「見えない価値に気づく」というのがありました。リビングリテラシーという言葉の力そのものが、なかなか理解しにくいというか、見えない価値だと思うんですけど、そういったものを、これまで、家庭科の場合には、小中高とかなりレベルが違うんですけど、学校の先生方と議論することや、小学校の先生方と一緒に仕事するという経験はありましたか。

◇松村氏

小学生を集めるときは、学校は絡まないでやっていました。土日に子ども達を集めるのに、PTAと組むというのはあったんですけど、基本、先生は絡んでないので、先生方の興味がどこにあるとかというのは正直わからない部分ですね。小学校では、防犯・安全の方では、学校と組んでやってますね。

◇北原教授

研修会や講習会に休日を使って学びに来る学校の先生方というのは、狙いはなんでしょうかね。

◇松村氏

衣食住をやらないといけないんだけど住がわからない。それで教えてくれる場があるので、ということたくさん家庭科の先生が来てくれるわけではないです。そこに興味を持って問題意識がある方か、住に興味がある方ですね。また、自分の家を建てた方、がちゃんと勉強してみたいという方が多かったですね。そんな形で知り合いになってその後、講習を兼ねて、うちの学校にも来てくれませんかとか、それで出前授業に繋がっていくケースが結構あるんですよ。

◇北原教授

そういう中で、見えない価値に気づくってすごく大事な言葉で使いたいなと思った言葉なんですけど、見えない価値に気づくリビングリテラシー、みたいな話を、青森県に対してアドバイスというか、もう少しお話いただけませんか。

◇松村氏

私は北海道のオホーツク海に面する興部町の出身で、人口3千人ぐらいしかないんですけど、田舎がいやでいやでいでしょうがなくって、都会に出た人間なんです。でも30過ぎていろんなことを見ると田舎のことが気になってきて、役に立ちたいし、いいところに気付き始めました。考えてみると家族とか地元の大人もみんな嫌だったんですね。田舎が。この町すごくいい所だからもう一回戻ってきて住みなさいなんて言ってくれた人は誰もいなかったんですね。それはものすごい問題だなと思ってい

て、親がこんな所にいないで都会にいった方がいいよっていう教育を受けてたんだと思うわけです。それは学校でもほとんど同じで一度田舎を出ないとダメかもしれないというのはあります。一度出た時に気が付きが早く深まるんじゃないかと思うんですね。そのような教育を受けたからずっと興部町にとどまって外に出た時と同じように感じるができるかってという自信はないです。お答えになっていないんですが。

#### ◇北原教授

地域のことを学ぶ小学校から中学校の勉強に、その地域のことを勉強する郷土学習がありますけど、地域をしっかりと学んで外に出て行って、出て行くからこそこれまで住んできた地域というのが分かってくるという意味ですよ。それに風土というのは、まさにその地域に住んでる人にしかわからないことで、住まうとか地域性みたいな話がでてくる。最初に研究所で拝見した子どもたちの教科書、最初の単元は確か、北海道の住宅と沖縄の住宅を比べるページでしたよね。すごく分かりやすいと思うんですけど、その作り方、考え方、編集の方針は、地域のことを知ってもらうということと、知らないこともいっぱいあるよねと子供たちに伝えていくことだと思うんですけど、どうでしょう。当たり前なんですよね。生活ってものすごく当たり前で、家の中があったかいのも当たり前だし。というその当たり前を当たり前でないことに気づくためには、比べてみないとわかんないことがかなりあって、沖縄とか東京よりも青森の部屋の中はあったかいんだよと言っても、何それと言われるわけです。やはりそこは教育としてその前をちゃんと紐解いてあげることが重要なのかなと思います。多分東京あたりの知合いの家に行って、今日みたいな時期に行った時の暖かさと青森とは全然温度が違うでしょうね。東京は寒いですよ。北海道は冬と夏のアイスクリームの売れ方がほとんど変わらないと思います。僕は三重県生まれなんですけど、冬場はアイスクリーム買えなかったですからね。木村先生は子供たちにこういった授業をやってきて、当たり前だと思ってるのが今回で改めてわかったことや子供たちが驚いたとか、関心を持ったことが結構あったと思うんですけど、掃除の仕方もそうでしたね。昨年度行った授業の中で東洋建物管理の方に掃除の仕方を学ぶ授業がありましたけれども、ほうきで掃く時にどういふはき方をしたらいいのか、掃く方向があるって皆さんご存知でしょうか。時計回りに掃いていくとほうきでは片付くんだよとか。右回りですね。それから雑巾の持ち方というものもあります。私たち教員も掃除の時間に掃除を教えますけど、掃除の仕方を習ってきて教えてるわけじゃなくて、自分もそうやって掃除させられてきたという思いで教えているか、あと時間内に効率的に終わらせるにはこれがいいんじゃないかっていう判断でやらせている。そういう形なので雑巾のかけ方一つ、持ち方一つ、それから箒のかけ方一つなんていうのはやっぱり専門家の方の話じゃないと私達自身も気づきません。子ども達もすぐ家に帰って教えなきゃって、家に帰って伝えたくなるって最高の学びなんです。特にこの住まいに関する学習ってそうですね。例えば家の片付けの授業や、リフォームの話聞いた上でそれを自分の家で実践できるかというあたりが教えにくいと思うんですけど、先生の授業で、宿題で実践してきなさいというような授業はされるのでしょうか。

#### ◇木村氏

長期休業期間に、各家庭で見つけた所、自分で課題だなんて思うところを一つ選んで、家庭科で学んだことを活かして解決するという宿題があるんです。そうすると、おばあちゃんが生活するのをよくするには物の置き方を変えた方がよいのではないかと、とか、向きがこっち側の方がおばあちゃん回り込まなくていいんじゃないかとかを考えてリビングの模様替えをしておばあちゃんも快適に暮らせる住まい方の工夫をしたという実践の事例がありました。

#### ◇北原教授

高校の授業を含めて、やり方次第ですごく面白くなっていく気がするんですけど。1つの学校で5回も6回も同じ授業をしたと、この辺りを県も考えてほしいんですけど、教える方も面白いんですよね。工業高校でなくても、インテリアコーディネーターや建築に興味を持った子がいたということで、そういった仕事があることを教えるのも大事だし、その職業に就かなくても上手に家を住みこなすとか将来自分でどういう家に住むのかと考えるには関心を持ったと思うんですけどね、子どもたちの成長として大きいのではないですかね。家に関心を持つというか、建築家にならなくても、自分の家に住むということは、高校3年生や2年生からも意識してるものですか。

◇木村氏

そうですね。進路選択が迫られてくるので、それとともにどこに住むのかとか、県外に出るのか通うのか1人で住むのか、寮に住むのか、住居の選択が関わってくるので、興味も高まってきますけど、今回学んだのは具体的な興味ではないんですよ。自分は1人暮らしだとか、1人だと怖いから寮かなーとか、それくらいなんです。建物として見てるというか、住まい方では見てないです。でも、今回のような授業をすると住まい方でその建物を見るようになる。

◇北原教授

テレビで地方の女の子が東京に家を借りるというので平川の子だったんですね。高校の近くで家の周りには何もありませんという写真を出して、そのあと東京をだすので非常にずるいのですが、シェアハウスだと一人35,000円で住めると聞いていたら、電気代とかガス代とか合計すると5万円なんですよ。それでも安いと思ったんですけど、その子は勉強していないから、35,000円って書いてたじゃないですかって言って辞めたんですけど。じゃあ電気代とかどうするのって話なんですけどそのような当たり前のこと、リアリティをしっかりと考えると一歩進むのにと。リビングリテラシーを青森県でしっかりと教えていると面白い番組になったと思うんですけどね。住んでいるけど、住まわされているというか、与えられた環境に居るっていう感じなので何も疑問を持たないですし、深く考えもしないのが普通ですよ。アメリカだと高校生の家政というのはホームエコノミクスですからね。高校3年生の教育で教えるのは、クレジットカードの持ち方です。最初にローンを教えるというのがアメリカらしいですが。家というものに自分がどうかかわるかっていう授業が必要だと思うんです。ここで松村さんにお聞きしたいんですけど、先ほど、地方に住んでいたから田舎と都会とってという話がありましたが、住まうという本質から離れた都市の住まいとか、その延長にコミュニティの問題とか、一緒に住む人あるいはその近所関係等住まいの重要な問題・関係というのは、作っているカリキュラムの中で何か作られているのですか。

◇松村氏

集まって住まうことの価値みたいのは共通なんですね。集合住宅にどうやってくらししていくか、シェアハウスもそうですし、ある意味、田舎は集まって住まう、すごい優等生なわけですよ。そう考えていくと、これって田舎だと普通にやったことじゃないのみたいなことに気づいてくるんだと思います。今はいろんな関係が家族で完結しているので、そうではないことを教えるのって実は難しいんだと思うんですけど、リビングリテラシーをちゃんと教えていくとその辺が見えてくるんじゃないかなと思います。だから、地方の方がイメージしやすいということがありますよね。

◇北原教授

石巻で災害公営住宅をつくるときに、公営住宅は抽選で入るんですけど、地域の人たち優先でコミュニティタイプの平屋の長屋を作っていくわけですよ。関係性を持たせて。そういう話は都会では出てこないじゃないですか。特別という話であって、公営住宅として考えたらまずいよねって話になっ

ただ、災害公営って意味が違いますよねとってそれで建てたんですけどね。地方の方が教えられるんだけど、都会の方が地域のコミュニティとか地縁を豊かにしなさいというつもりはないけど、その面白さみたいなものが、理解しにくいというか、教えにくいのではないのでしょうか。

◇松村氏

難しいと思います。どう考えても都会の方が利便性高いので、コミュニティに頼らなくて済む社会を作ってきたと思うんですね。ただ、これからはそうもいかないと思うんですよ。昔のような、しょうゆを貸し借りするような間柄に戻るって話ではなく、どんな関係を作れなきゃいけないのかというのを考えないといけないと思うんですね。私がそれを問われたときには、都会でも困った時に困ってるって言える関係じゃないかと。都会では人から無償のサービスを受けられない関係になっちゃっているんで、困ったとき助けてくれって言える関係を作ればいいと、そんなことを思っています。

◇北原教授

集合住宅を作っていく時、区切られた空間にコモンという空間を作って、みんな寄り添うことを考えたけれども、困ってることすら気付かないわけですね。そういえばあの人最近見てないよねって、ちょっと家でものぞいてみようかって、地方の場合はあり得るが、都会の人たちにとってみればエレベーターで会うことはあるけど、そういう中での共同住宅の面白さとかを教えるにも事例が少なすぎる。コーポラティブやコレクティブみたいな、いわゆるコ・ハウジングの楽しさってというのは、先生方の講習会で教えられたりするわけですか。

◇松村氏

それはやっていないんですけど、あまりにお金でいろんなことをいわゆる地域運営とかマンション管理とかお金でアウトソーシングしすぎたんだと思うんですね。自分たちでやらないんですよ。やなくても時間が無いと言ってやなくて済むようにしちゃってるんですけど、さっきの困ってる時に困ってるって言えるためには、何にもしてこなくて困ったときに困ってますと言えないんですね。見守りを特に男性が拒否するのは、地域のために何にもやってきていないからなんです。だから、困ったときに困ったと言えるためにはマンションであればマンション管理で自分が何か貢献できていれば困っているって言えるんですよ。そういった意味でも、先ほどの幸福度の話じゃないんですけど、身の回りのまかないの部分で自分達でやるというのはこれからの方向性のような気がしますね。

◇北原教授

そうですね。今の話を聞いてると、リビングリテラシーというのと、どうやって住宅を持つとか、寒くないようにどうやって暮らすかというようなことを教える方がいいんだと思うかもしれないけど、今みたいに地域でどうやって住んでいって、どうやって自分の価値を見つけながら高齢化社会の中で生きていくか、子供たちにどんな夢を持たせていくかという学問であって、どんな家を安く持つかという議論と全く違うような気もするんですけど。木村先生、学校ではこういった授業を進めていくというのはなかなかなくて、本当に役に立つはずのこういったものは力入れて教えていく時間が用意できなくて、これを教えたらもっと面白くなるのにというふうなことがいっぱいあると思うんですけど、教師としてそう思うことはありませんか。

◇木村氏

私は青森県に来てから 20 年ぐらいですが、地域の実態にあった内容で教えるのが最適だと思います。都会の内容で教えても子供たちは何それみたいな話で役に立たない。それよりはあそこの町会や店ではこういうことがあって、この人はこういう活躍をして、だから関わりを持つとこういう豊かな生活ができるんだよ、というような、自分たちが実際に想像できる教材というか、そういったものが

とても必要で、家庭科では特に生活全体を扱うものですから、私たち教員はいつも探しているんです。広告や新聞記事などを全部見て教材に使えないか、子ども達にリアルに学ばせることができるものがないかいつも思っています。

◇北原教授

そういう意味で言うと、今回の授業でプロに来てもらっているいろんな情報を得たわけですけど、最近では建築士会にしる JIA にしろ、登録制度で地域貢献のポイントをためないといけなくなっています。ですから、建築士に言うて来てくれるのではないかと思うのですが、どうですか。

◇木村氏

是非、ポイントのためでも来ていただければ。

◇北原教授

こういうことを子ども達に教えたいと思っている人がたくさんいると思います。さっきの掃除の仕方を教えてくださった方も、とてもよろこんでいたと思うんですけど。右回りにやれとかね。僕たちが知らないこともいっぱいあるので、すごく生活に近い部分でかつ地域のことで、すごく良い環境に僕たちはいるんだということ。青森だから高气密高断熱のことをよく聞くんですよ。青森だからこそ高血圧が多いんですよ。つらい温熱環境にいるがそのおかげで断熱は最高水準ですからね。暑すぎますね。北海道も。松村さんも家では短パンと T シャツでテレビ見てると思いますけど。

◇松村氏

短パン T シャツはないですけど、セーターは着ないですね。専門家の活用の話なんですけど、問題としてあったのは北海道の市町村で人材バンクというものをつくって自薦で手を挙げてもらったんですね。そうするとレベル差がものすごく出て。住環境教育も先ほどもお一人で 6 コマと、さすがに 3 コマ目が一番良かったりするんでしょうけど。やはりちょっと選びたいですね。ピカイチの人にまずやってもらって、その人とコンビで育てていくとか。あまり自薦に頼ると危険かなと。学校現場がいやになっちゃうんですよ。

◇北原教授

教えていただく方々の練習会と言いますか、みんなで議論できる場があるといいですね。うちの地域だったらこういう話で、あちらでは「かつちょ」があったり、こちらでは「こみせ」があったり、地域の教材を育てていきながら地域の人材をリストに加えていくとどんどん広がっていくと思うんですよ。ですので、地域の方々に絡んでいただくというのはこういう学問をしていくのにとっても大事だと思います。地域の方々にも今日来ていただいていますので、会場の方から声を聞きたいと思います。

## 6 質疑応答

◇会場質問者 1

弘前もそうなんですが特に青森を中心として豪雪が毎年深刻な問題なわけですよ。したがって、これを解決していけば、青森市に U ターン、あるいは I ターンして移住する方が年々増加すると思います。行政の問題も挟まっているので聞きづらいところがあるんですが、克雪問題について伺いたいです。

◇北原教授

寒い所ということであれば、旭川で今の話はどうでしょう。

◇松村氏

物理的なことと人間関係の問題だと思うんです。北海道は昭和 30 年代から 40 年代にかけてブロック造の住宅がものすごい数できたんですね。70 坪くらいのところに建てていって、街並みとしては美

しいですけど、昔から屋根雪問題ってあったんですよ。ですが昔は大きな問題にならなかったんですよ。自分の家の雪が隣の敷地についても問題にならなかったのが、若い人が住むようになって何ができたかというフェンスを立てるんですよ。雪が飛ばないように。その街の魅力を下げ方になってしまう、それは違うんじゃないかと思うんですね。ガラスを破るほど雪が飛んでくるわけではなく、単純に隣の雪が敷地に入ってくるのが許せない。人間関係の部分強化しないといけないのかなと思います。フェンスつくるつくらないで裁判までいったケースもあるので。

#### ◇北原教授

三角屋根で落ちてくる雪を多少隣の敷地に入ろうが気にしなかったというくらい余裕があったのと、世知辛い人間関係がでてきてしまうとどうすればよいか。道路の除雪の方は役所の方でやるとしても、家の方の除雪というのは家庭のリビングリテラシーの中で、雪とどう向き合うかというのは、とても重要で、材料にしなきゃいけないと思うんですよ。昔、中間領域の研究をしておりましたので、自分の領域が一番わかるのは雪かきだという風に指導教員に言われました。自分がどこまで雪かきをしているかによってこの人はどこまで自分の領域だと考えているとすぐわかると。でも、思ったのは今日実はその方がいらっしゃるんですけど、弘前に来た時に住んでいた、その直前まで住んでいた建築家がいまして、その方がいつも雪かきをするときに隣のおじいちゃんの家までやってるんですよ。そこで切ってしまうと全体的によくないので。ありがとうございますとのおじいちゃんは仰るんですけど、こういう関係性というのはルールで教えないけど、地域の関係性というのは役所と関係なくて地域で作っていくやり方だろうなと思いましたね。北原さんのお向かいには北川さんというんですけど、僕が入院していたこともあり、やってくれるんですよ。いいんですよ、暇だからって言って。そういう関係も実際あるんですよ。どちらかというともみんなそこ嫌がるんですけどそういう感じでやっていくことをうまく私達感じられるところに住んでるんだと気がするので、さっきの質問はどこに行っても厳しくて答えが無いんですけど、ボランティアでやるべきであるという話があったり、昔はみんな働いた時にお金を出せるように雪マネーというものをつくって栗山町なんかはそうです。若い人がやったら、それでエコマネーもらって、そのエコマネーでまた何かやる。そういう形のものをやるとなったら、実際問題として人の力が足りないという話があるので、これから考えると人が少なくなってくるので、それをだれがやっていくのかすごく厳しい話になっていくと思ひまして、今後リビングリテラシーみたいな話だけでなく、コミュニティという話をした時の雪かきの問題みたいなものも、地域性として大事な項目として入れなきゃいけないと思うのですが、いかがですか。

#### ◇松村氏

隣のどこまで雪かきするって聞いてすごく思ったんですけど、お互い様ってありますよね。僕が困っているとき向こうが助ける、向こうが困っていると助けるってあるんですけど、田舎を見てると世代を超えたお互いさまってあるんですよ。あんたのおじいちゃんに世話になったからいいんだ、いいんだっていうお互い様の対象が変わっても、ある地域の中でお互いさまが成立するような、自分が時間ができたらやるよって、今やってくれてありがとうございますというような、その世代、時代を超えたお互い様という発想が出てくれば人が減ってきて大丈夫なんじゃないかなと思います。

#### ◇北原教授

リテラシーの中に、雪片付けも入ってくるってことを青森県にも言いたいと思います。時間もないので次で終わりにしましょう。

#### ◇会場質問者2

今朝起きて住まいのシンポジウムあるぞと思ってこどもと話をしたんです。小学校のときに国語の

授業で詩を習ったときに感動した詩がありまして、太郎の太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪降り積む、次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪降り積む、この2行の詩。

これ私好きな詩なんですけど外は深々と降るんだけど家はなんだかあったかいと、子どもに知ってる？って聞いたら、僕知ってるよと。太郎を眠らせでしょうって。自分の親からしてもらった冬の間、帰ってきて家の中はあったかい。帰ってきてあったかい家っていうのは自分も今つくれているのかなとこれで継承かなと。このリテラシーの事業は、家庭科の先生がメインになるかと思いますが、国語の先生も実は得意なんじゃないかなと思ひまして。家庭科以外の先生も、そういったところを切り口にしてはどうだろうと。また、建築家の黒川紀章さんの話が出た時に実は優しい話じゃなくて怖い話だっていうことを初めて聞きました。二郎って寒さの中で寝ながら死んだと感じた人がいるかもしれないのかなってちょっと今考えてます。なのであなたたちはこれどう感じますかと。リテラシーの授業で、人の温かみと感じられるような社会につなげるといった視点の事業にさせていただくと子どもたちが幸せになっていくかなって感想です。

◇北原教授

木村先生から、今の感想を聞きながら今日の議論をまとめていきたいと思ひます。リビングリテラシーという授業があるわけじゃないですが、いろんな分野が関わるだろうし、どう伝えていくかという話は教科に限らないですけども、お答えできる部分があったら、こうやったら絡んでいけると思うということも含めてお話しいただけますか。

◇木村氏

各教科でも家族のあり方とか生活の仕方のようなことはそれぞれの特徴をだした教材や、その担当の先生によってそれを色濃く出すような教材をすごくお持ちで、きっと住まい方の内容についても実践されていると思ひます。学習指導要領が改訂され、カリキュラムマネジメントという言葉が出てきて教科それぞれをつなげて学習させて、子ども達の学びを深めていこうじゃないかということが文科省から言われていて、横でも縦でも斜めでも串刺しのようにして学びをつなげていくことを目指しているところなんです。今お話しいただいたような国語の詩を題材に住まい方を考えさせるとか、それを違う地域だとどうなんだろうと社会の授業でやってみたり、理科で実験的にやるといったことも十分可能かと思ひます。今家庭科だけを紹介させていただきましたが、他校では既に実践してる場所もあるかもしれません。それは教員の指導力にかかってくるのですが、これをきっかけに発信して、青森県の子供たちのために温かみのある、自分たちの生活はすごく豊かなんだと思うような授業展開もできるかと思ひます。高校の家庭科の強みは、自分たちで作っていく家庭環境というものをメインに授業しているんで、自分たちが置かれている状況が、いかなる状態であっても自分として生活を作れるんだと希望を持たせられるし、実現させる力を持たせることができますので、お話しいただいたことも含めて、私もこれから実践を積み重ねていきたいと思ひます。

◇北原教授

ありがとうございました。では、松村さんに今のお話を受けた感想でもお話しいただけたら。

◇松村氏

住教育やるときに諸外国の、特に北欧を調べましてクロスカリキュラムと言っていたんですけど、例えば結露は理科と家庭科ということで、それを向こうではテーマごとにやってるって聞いて、すごいなと思ひて、そういう話もしたのですが一度も実現したことがなかったですね。でも今聞いて、指導要領がそのように進んでいることがよいことだと思ひたのと、今日いろいろと青森県のお話をきいてすごいと思ひたのが、教育サイドが教材を作っていますよね。うちの場合、建築サイドがつくってし

まったんですよ。そこの違いは相当あるなと思っていて、あくまで先生サイドが作った方が絶対分かりやすく、生徒のためになるんじゃないかと上手だと思います。県の建築サイドが主導してお金を出すんだけど、先生サイドが作っていきって見事だなと思って聞いていました。

#### ◇北原教授

ありがたいというか、私が部会長となって先生方に押し付けてしまったということもあるんですけど、実際に動かしてく人たちが考えないといけないと思ったので、良かったと思います。さっきの質問を受けて、地域の中で見えない価値に気づく人間や判断できる人間をつくっていく話で、そういう学問があるということはどんなに幸せかって気がします。クロスカリキュラムとか言い方ありますけど総合的な学習で、国際理解をさせようとか福祉の勉強をさせようってテーマ学習になってしまって、なんの教科か分からないけどいいよねって話が、リビングリテラシーが入っていく話としてはすごく可能性があるなと思いました。松村さんの講演で見えない価値ってことがありましたけど、あずましいという言葉を使いました。早稲田大学の戸沼先生は、なんのためにあずましいという言葉を使ったかというイギリスから入ってきた言葉を訳そうと思って使ったんですね。アメニティという言葉でした。アメニティってなんだ、快適だって、そんな格好つけた言葉じゃなくて、イギリス人はこう言っていると、あるべきものがあるべきところがあると、気持ちいいんだと気持ちいいだけの話だと。大学の時ですけど、そんないい言葉があるんだと。アメニティって英語を快適とは言わずに、ここにあるからいいんだって言葉をつかえるといいなと、そこに住むとはおもいませんでしたけど。

あずましいというのはいいなと思って、そういう言葉が見えない価値としてそこにあるっていう、当たり前ものに気づきながら、いろんな教科に関係なく地域というものの良さに気づきながら、雪としっかり戦いながら青森のリビングリテラシーに今後期待したいと思います。

見えないけどみんなが知っている価値というものを学びながら、しっかりと専門家の方々に入ってもらいながら、技術としても高めながら青森の次の世代に対して住まうというようなことをしっかりと伝えて継承できるように私たちが関わっていくべきではないかと思いました。まだ始まったばかりですけど、みなさん関係しているわけですけど、こういう形で進んでいくことを、青森に住んで青森で生活していくことをイメージできるように、皆さんと一緒に学んでいき、なおかつ悩みながら進めていきたいと思いますので、今後とも御協力をお願いしたいと思います。最後になりますけど特に松村さんの場合には北海道からくるということで飛行機が飛ばなかったらどうしようかと思っていましたが、来ていただきました。いっぱい貴重なお話をいただきました。お二人に感謝の拍手で終わりにしたいと思います。今日はありがとうございました。

## 7 閉会

#### ◇司会

パネルディスカッションは以上となります。お三方貴重なお話どうもありがとうございました。改めて大きな拍手をお願いいたします。それではこれもちまして青森県住まい住環境学習自身シンポジウムを終了致します。皆様本日はどうもありがとうございました。